

## 幸せへの近道

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会  
会長 田中 宏



人は誰しも「幸せになりたい、幸せにしたい」と願う。そして何が幸せかを考える。今回、幸せというものに焦点を当てて考えてみた。

昨年、フランスの経済学者、トマ・ピケティの出した「21世紀の資本」という本が世界中で100万部を突破するベストセラーになった。昨年12月には翻訳版も出版され話題を呼んでいる。資本主義はお金が富を生み社会格差が広がるというものだ。つまり「資本主義の行く末は格差社会である」と言っており、この本では、それを理論的に分析してある。

私が社会人になった平成2年はバブルの絶頂期であり、そのころの日本では、「2割の人が8割の収益を上げ、8割の人が2割の収益をあげる」といわれていた。しかし、前者も後者も給与はそれほど変わらず、能力や仕事の結果に見合った給与をもらうべきであり、不公平だという声が多かった。それから25年がたち、まさに当時のビジネスマンが望む“格差社会”になったのだ。一部のマスコミでは、あたかも格差社会は政府が作ったと報じているが、全てが正しいわけではない。されど資本主義に対し賛否を唱えても、その流れは変わるわけではなく、受け入れざるをえないのも事実である。

また2009年に出されたもう一つの分析がある。アメリカのプリンストン大学のAngus Deaton教授は年収630万円までは幸福感は比例するが、それ以上はプラトーになり相関しないという研究結

果だ。この研究結果は、収入と資産だけが人の幸せだといえないことが分かる。

私はこう考える。「自分が誰かを笑顔にすることで、幸せを感じられる自分になる」これが幸せの近道だと。

私たちの仕事のフィールドは医療であり、まさに医療というのはそういう仕事ではないかと思う。医師・看護師・薬剤師・診療放射線技師・臨床検査技師・理学療法士…多くのライセンスを持った専門家がいて「各職種の立場」ということを時々耳にするが、患者にとっては関係のないことである。もちろんライセンスで認められた業務範囲というものが存在するが、多くの場合、患者さんのために誰がやってもよい仕事は山ほどある。例えば患者への説明がそうだ。病気の告知や診断は医師が行うが、すでに告知や診断をされた患者からの相談に乗ることは、医療従事者として行うべきことである。また進行した悪性の疾患では、残念ながら治すことができないものもある。命を救うことはできないが、心を救うことはできる。さらに本人だけでなく、その家族を救うこともできる。それは職種に関係ないはずだ。

そのためには物理的な基礎知識は当然であるが、患者の病気、そして患者自身のことを知らなければ患者を救うことはできない。

私たちが、今、患者から求められているのは、診療放射線技師として、医療人として“画像の向こうの患者を診る”ということだ。